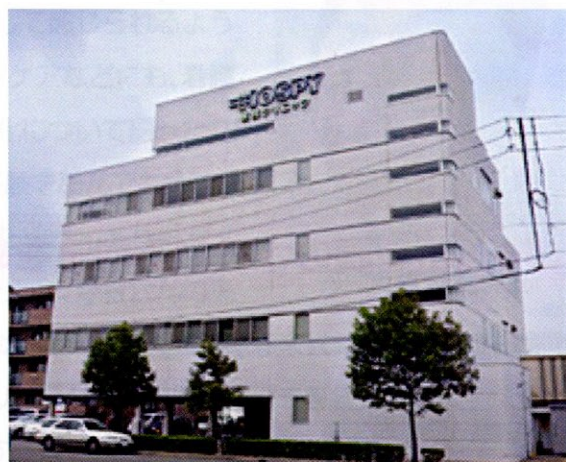


# 透析施設最前線 Vol.3

## HOSPYPグループ 東海クリニック・東海知多クリニック



### 東海クリニック

所在地 : 東海市大田町汐田10  
透析ベッド数 : 75床  
患者数 : 205名

### 東海知多クリニック

所在地 : 知多市日長字城見坂8-1  
透析ベッド数 : 30床  
患者数 : 58名  
東海・東海知多クリニックの看護師数 39名  
(透析療法指導看護師 9名、透析技術認定士 1名)



## ■ 東海クリニック、東海知多クリニックの現在

東海クリニックは、1975年にHOSPYPグループの透析サテライト施設として開設され、1997年に現在地に新築・増床・移転した。同クリニックの姉妹センターである東海知多クリニックは、2003年に開設されている。透析室は、東海クリニックに3室、東海知多クリニックに1室あるため、看護部もこれに合わせ、それぞれのクリニックに3部署、1部署の体制で看護師を配置している。これらの4部署は、内田看護師長が統括しているうえ、毎年4月には部署間での人事異動が行われるため、これらの4部署は1つの組織と見ることができる。そのため、今回は東海・東海知多クリニックの看護部の活動を、まとめて紹介させていただくこととした。



内田佐喜子看護師長

両クリニックの大きな特徴として、医師、看護師、臨床工学技士(CE)の敷居が低く、意見交換がスムーズである点があげられる。「互いの専門性は明確にしている、それぞれの専門性を尊重し合い、共同で働く部分については、意見を出し合って決めるという職場風土があります」と内田看護師長は、組織の風通しの良さについて語った。

教育面での看護師とCEの連携も密接で、例えば、入職時教育でも看護の比重が大きい内容では、CEの教育を看護師



が担当する。また、看護師教育の講師として、CEを招くこともあるという。

もちろん、看護部の部署間の連携がよいため、欠員の補助、休暇の消化についても協力し合っている。主任クラスも欠員の補助などで、他の部署へ出向くこともあるため、それぞれの状況を良く把握しており、これが一層の連携強化につながっている。「各部署の主任たちが看護部全体の状況をよく理解しているので、やむを得ず患者さんに部署を変わっていただくときでも、申し送りが確実に行われ、患者さんにも快く移っていただくことができます」と永尾看護主任は語った。HOSPYPYグループでは、主任が部署の責任者というコンセンサスが確立している。すなわち、多くの施設のように師長が責任を負い主任はリーダー業務という組織とは一線を画すものとなっている。これも、主任クラスのアクティビティをあげる要因の1つになっているものと思われる。



永尾洋子看護主任

さらに、両クリニックでは、各部署の看護師詰所の医療器具、書類の保管場所が統一されており、他部署から応援に来た看護師も、戸惑うことなく業務を遂行できる。もちろんこのような配慮は、リスクマネジメントへの貢献度も高いと推測できる。

## ■ 特徴的な学習会を開催

クリニック内の委員会活動の一環である院内教育委員会では、年間に10を超える学習会や映像による学習を企画・運営しているが、その1つに「先輩・同僚ナースの体験から学ぶ会」がある。この会は、数年前から取り組んでいる「先輩たちの知恵袋」という勉強会を学習会に発展させたもので、看護師へのアンケート調査結果などをもとに決められたテーマに沿って、先輩看護師や同僚に自身の体験を発表してもらい、その後グループディスカッションを行い、体験を今後の看護の糧として生かそうというものである。4回シリーズとして実施され、「苦手意識のある患者様への対応」、「先入観があり、コミュニケーションのとりにくい患者様への対応」、「働きやすい職場にするために努力していること」、「自分の体験から学んだこと」がテーマとして取り上げられた。学習会出席にあたっては、テーマについて意見を書いてくることが求められるほか、学習会終了後も体験談発表者に対する感想文の提出も求められる。このような作業を通じ、体験談を血肉化することが可能になって行くのだろう。シリーズ最後の4回目には、両クリニックの主任全員が体験発表者となったが、「皆、持ち時間の5分を大幅超過して熱弁を奮っていました」と内田看護師長は笑顔で振り返る。



横内雄子看護主任



片岡春美看護主任代行

この学習会開催の前身である「先輩ナースの知恵袋」開催のきっかけは、グループ傘下の施設に新規入職者が多数採用された時期があり、管理者の中堅看護師への働きかけの活性が低下したことがあった。このため、中堅看護師のモラル低下の恐れが出てきた。そこで、役職を持たない看護師に体験発表してもらい、中堅のモラル向上を図った。実際に開催してみると、新人の中にも「先輩は自分たちと同じ悩みをくぐり抜けてきた」という共感が起こり、世代間の融合という意味でも大きな成果となった。「先輩の体験談を聞いた新人看護師が感動の余り泣き出すハプニングもあり、非常に印象的で、先輩と新人の差もぐっと縮まりました」と横内看護主任は語った。このような学習会を



通じ、透析療法指導看護師などの資格は持たないが「得意分野」を持つ看護師も生き生きと仕事ができるようになり、職場の活性化につながるという。

この学集会は今も継続され、現在まで6回開かれている。「穿刺技術」の学習会は、上述の学習会のテーマであった、「(穿刺が困難なため)苦手意識のある患者様」から発展したもので、徹底的にチェックリストに基づいて自己チェックし、穿刺に関する自身の長所と短所を自覚するところから始める。片岡看護主任は「この学習会の後には、刺し方が優しくなり痛みも減ったと患者さんからも好評でした」と、学習会の目に見える効果について語った。

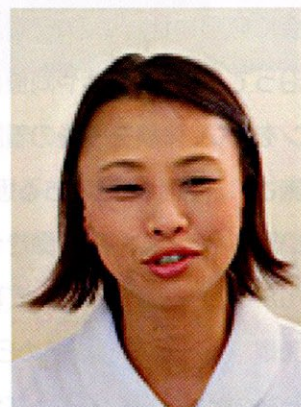
## ■ 活発な委員会活動

東海・東海知多クリニックでは、委員会活動も活発で、上述の教育委員会のほか、リスクマネジメント委員会、院内感染対策委員会、災害対策委員会、看護記録委員会、PC委員会が活動中である。

リスクマネジメント委員会では、医療事故防止のための対策を進めているが、(1)毎月のインシデント、アクシデント集計と報告、(2)インシデントレポートからインシデントの要因を分析、(3)医療事故防止のためのスタッフ教育、(4)急激な血圧下降、心停止などの患者急変時の対応方法の教育などを主な活動としている。インシデントレポートに関しては、ほとんどがレベル0か1で、2が少数、3はほとんどないという状況である。スタッフ教育として、危険予知トレーニング(KYT)を実施しているが、徐々に指差呼称が増えつつあるという。KYTを開始して間もないため、統計的な実証はできていないが、インシデントは減少している。

また、インシデントの報告者を決して非難しないという、職場風土も定着している。「報告がないまま、ずるずると同じ状況が続けば事故の危険性はどんどん上昇します。報告があれば対策に結び付けられ、事故が未然に防げるので「見つけてくれてありがとう」と素直に思うことができます」と中尾看護主任は、報告者も報告を受ける側も素直であることの重要性を語ってくれた。

院内感染対策委員会では、日本透析医学会の「透析医療における標準的な透析操作と院内感染予防に関するマニュアル」と、米国のCDCガイドラインに基づき、独自の院内感染対策マニュアルを作成し、感染対策にあたっている。主な活動は、(1)感染防止の基礎知識の再教育と対策の見直し、(2)院内感染予防策の推進、(3)血液汚染対策、(4)教育活動、(5)針刺し事故の把握と対策立案である。



中尾幸子看護主任

災害対策委員会では、予測できない停電、火災、地震などの災害時に安全が確保できるよう、スタッフの教育訓練と、患者さんの指導を定期的に行っている。主な活動は、(1)災害訓練の実施、(2)災害時他施設でのスムーズな透析を可能にする透析情報個人カードの管理、(3)災害バッグの中身の管理を行っている。災害訓練時には、佐藤晴男院長自身が救助者役や患者役をこなす姿も見られるという。

PC委員会ではシステムの安全性や患者サービスの向上が目指されている。東海クリニックには、コンピュータに精通したCEが在籍しているため、独自に作成したプログラムも数多くある。また、看護師も上述のCEの指導を受け、現在では看護師全員が複数のソフトを使いこなせるレベルにあり、学会発表時のスライドなども看護師自身で作成するほど、スキルアップしている。